

広域連携だより



松江教育事務所管内 広域特別支援連携協議会 事務局

第6号

〒690-0011 松江市東津田町1741-1 TEL 0852-32-5772 fax 0852-32-5770 平成26年3月発行

広域特別支援連携協議会とは

今年度の
テーマ

- 一貫した支援体制のために
- ～学校間でどうつないでいくか～

広域特別支援連携協議会は今年度で7年目を迎えました。この間、管内の松江市、安来市の小・中学校では、校内委員会の設置、特別支援教育コーディネーターの指名、個別の指導計画の作成率は100%となり、支援体制も整ってきました。今後は、さらに各園や学校での障がいのある子どもたちの自立と社会参加をめざした、具体的な指導・支援の充実が求められています。

今年度、松江教育事務所では、教育事務所に設置されている特別支援連携協議会がどんな会なのか、管内の先生たちに知っていただき、学校とつながった協議会にするには、どうすればよいのか、今後の連携協議会の在り方を検討しました。

そこで、障がいのある子どもたちの自立と社会参加をめざし、支援をつなぐために、これまでの関係機関の横に広がる連携から、就学前から学校間をつなぐ縦の連携に重点をおくことにしました。また、これまでの関係機関等の代表の委員さんから、子どもや保護者さんと直接関わっておられる、保健師さんや幼稚園、学校の先生たちを中心とした14名の新たな委員さんへと交代し、就学前からの学校間の支援をつなぐための方策についての協議・意見交換をいただくこととし、今年度2回の協議会を開催しました。

専門家チーム・巡回相談とは

管内の学校等に対して、障がいのある幼児児童生徒への相談支援を行うために教育事務所ごとに設置されている相談支援チームです。学識経験者、医師、心理士、特別支援教育担当者等、12名の方に委員・巡回相談員をお願いしています。

【専門家チーム会議】 平成26年2月13日 開催

★協議内容 「医療と教育のよりよい連携の在り方について」

★話題提供 「発達障がいと医療」 いしいクリニック院長 石井尚吾委員

石井委員より医師の立場から発達障がいについて、医療の診断基準や薬物療法など専門的なお話をしていただきました。その後、質疑も交えながら各委員から保護者や子どもを医療につなぐタイミングや医療受診後の学校の対応など医療とのよりよい連携を進めるためにどうすればよいのか、意見交換を行いました。

「広域連携だより」(6号)では、広域特別支援連携協議会の取組と様子について、皆さまにお知らせいたします。幼稚園や学校等、それぞれの場での特別支援教育充実のための取組の参考にしていただけることを願っています。

第1回広域特別支援連携協議会開催

平成25年11月29日

第1回の協議会では、子どもたちの自立と社会参加に向けての支援の現状や課題、日々の取組について意見交換を行いました。事前をお願いをしていたアンケートをもとに、それぞれの委員さんから「子ども、保護者、連携、体制等、に関わることで課題と感じていることや取り組んでいること」について発言していただきました。（各委員さんのご発言は、所属機関の代表としてではなく個人の立場でのご発言です。）

就学前（保健師）

- ★子育てに対する不安の解消や子どもの発達に対する気付きの促進、早期支援のきっかけとなるよう5歳児健診を実施している。実施にあたっては保育所、幼稚園、エスコ、医師等と連携しているが、発達特性の理解や障がい受容についてのさらなる啓発の必要性を感じている。（松江市）
- ★5歳児相談会を実施している。子ども未来課と教育委員会が窓口となり福祉課、保育施設や学校との連携を深めている。（安来市）

保育所・幼稚園

- ★幼児期には、今後自己理解をしていくための基盤になる部分を育てていくことが大切。「自分が好き」「ありのままの自分をよいと思える」ようなかわり、保護者への働きかけ、環境づくりが必要。
- ★まず保育者（保護者）の子ども理解が必要と感じる。
- ★幼児教育と小学校教育とでは違いがある。受ける側が、こういった情報が必要かを送る側に示して欲しい。

小学校

- ★6月頃に保・幼・小・中の連絡会を行い情報共有・交換を行っている。小・中は12月～、小・幼・保は1月、2月～、連携に関する会等を行っている。
- ★小学校からすべての園へ出向いて子どもの様子を見る。進学先の中学校へも出かけている。本人の見学も行っている。
- ★子どもの将来の進路、就労に対する小学校段階からの保護者の意識の持ち方が課題。

中学校

- ★保護者の同意を得た個別の教育支援計画を保・幼・小・中・高等部・高校ときちんと位置づけて継続性が持てると良い。
- ★関係機関との連携を図るために、特別支援教育コーディネーターが動ける体制であって欲しい。
- ★支援学級の生徒が多様化しており、進路先も多様。保護者の意向と生徒の実態と違うケースもある。先輩の話を聞く機会があるとよい。

高等学校・高等部

- ★その子にとってどういう学び（教科学習か作業的な学習）が向いているのかが進路を選択する上で重要であると思う。
- ★小、中学校での進路の見極めは難しいが、特別支援＝支援学校高等部ではない。最終的に通常学級で育てていくための特別支援という考えを持って欲しい。
- ★保・幼・小・中の支援の積み上げがいかに大事か。将来のあるべき姿（支援学校高等部か高等学校か、就労の形はどうか等）を見据えた上で早期教育が求められる。

行政（教育委員会）

- ★自己理解を促し、自分の得意なことを生かしていこうとする意欲や態度を育てるための支援の必要性を感じる。
- ★自分で選ぶ、自分で決める経験や自己有用感を持たせる支援を積み上げていくことが必要である。
- ★移行支援会議では送り出す側と受け入れる側とでどんな情報が必要か整理するとよい。
- ★地域への理解啓発の一つとして公民館の研修会でエスコスタッフが話をしている。
- ★子どもの発達段階に応じた課題を保護者と共有することが難しいと感じるケースがある。

第2回広域特別支援連携協議会開催

平成26年2月20日

第2回の協議会では、始めに3人の委員さんから就学前から小学校へ、小学校から中学校へ、中学校から卒業後の進路先へと、次のステージへ支援をつないでいく連携の取組を情報提供していただきました。安来市教育委員会主査の秦委員からは安来市における早期からの相談・支援について安来市就学移行支援事業での5歳児相談会の実施等、健康福祉と教育の連携した取組について紹介していただきました。また松江市立乃木小学校特別支援教育コーディネーターの松村壮一委員からは、支援をつなぐための小学校と中学校の連携について、年間を通しての小・中連絡会や移行支援会議等の実際についてお話していただきました。最後に松江市立第三中学校通級指導教室担当であり特別支援教育コーディネーターの中島恭子委員からは、支援を要する生徒の多様化している進路と多岐にわたる進路先との連携の難しさについて情報提供していただきました。第1回協議会で協議された支援の現状と課題、第2回協議会の3人の委員さんの情報提供をもとに、各委員さんからの活発な意見交換がなされました。学校間が連携し支援をつないでいくうえで【自己理解】【保護者の子ども理解】【早期支援】等が大切であることを共有化しました。

★意見交換より★

【本人の自己理解】

- ★小学生ではまだ言語化して自分の思いを伝えられない。青年期にかけて自分を言葉で語りだす。その時本人の本音を聞いてあげる人がいて（その思いを）次につないであげるとよい。
- ★障がいの自己理解の大切さは特別支援教育研修会でも意見が出ていた。今日の3人の話からもそこ（本人の自己理解）が大事だということがわかった。そこが課題だということは明確になっている。

【保護者の子ども理解】

- ★就学前に特別支援学級に入級しなくても支援が必要な子どもであるという認識を保護者にもってもらえることが大切。就学前の相談の充実が必要である。
- ★高等部では就労先の企業、ハローワークなど周りの人からいろいろ言ってもらえる機会がある。保護者の我が子の障がい受容に教育関係以外の人、第三者が関わると保護者の受け止めも違う。
- ★就学前の所できちんと子どもの実態を把握して保護者に伝えていくことが大切である。3歳児健診でわかると、早く（保護者に）話をしやすい。発達障がいは、見えてくる時期が遅くなり支援や就学相談が遅れ、（支援が必要だと）わかっているも保護者を関係機関へとつなげないケースがある。

【早期支援等】

- ★中学校では「この子は勉強が苦手でもこんないい所がある」という評価をする。しかし、勉強ができないということは、大人が思っているよりもっと本人にとっては辛いこと。勉強がわかることはとても大事なこと。（学習への支援の必要性）
- ★中学生になってから支援が始まる生徒は本当に難しい。早期からの支援が大切。
- ★連携を行う時、小学校から幼・保へ、中学校から小学校へと子どもの様子を見に行く等、受け入れる側からのアプローチがあるとよい。
- ★小学校と中学校とは学習スタイルが違うので必要としている情報の違いも出てくる。支援をつなぐためにそれぞれの文化の違いを知っておくことが必要である。

特別支援教育研修会

平成26年1月15日

テーマ：障がいのある児童・生徒の自立と社会参加をめざして
～学校間でどうつないでいくか～

「障がいのある児童・生徒の自立と社会参加をめざし、青年期における現状を知るとともに、それぞれのライフステージごとに育てたい力や必要な支援について考える」ことを目的に特別支援教育研修会を開催しました。管内の学校や関係機関、協議会の委員さん等、80名の参加者があり、今回は特に高等学校からの参加が多くありました。様々な立場の方々が活発に意見交換を行い、子どもたちの将来にとって大切なことは何かを共有できた研修会となり、参加者のみなさんに好評をいただきました。

実践発表

発表①「特別な配慮を要する生徒に対する支援」

島根県立宍道高等学校 教諭 岸 和美

発表②「就労と社会参加をめざした作業学習」

島根県立松江養護学校 乃木校舎 主幹教諭 菅 道子

発表③「就労期における支援の現状と課題」

松江公共職業安定所 統括職業指導官 間木 恭子

全体協議



★助言者 根大学教育学部

教授 小川 巖

★司会者 島根大学教育学部附属中学校

副校長 齋藤英明

昨年の研修会に続き、今年度も小川先生にご助言を、齋藤先生に司会をお願いし、3人の発表をもとに参加者全員で意見交換を行いました。「自分の強みがわかっていないと弱みも認められない。」「小さなことでもできたという積重ねが大切」「支援を受けることで自分の苦手なフォローされるという体験が必要」等々、支援をつなぐために「自己理解」や「自己有用感」の大切さが共有されました。また、「障がい受容」の難しさや「自己理解」に結びつく取組の紹介など活発な協議が行われました。

アンケートより

- ★幼児が大きくなって社会に出て行く時、今何を大切にしていけば良いのかが高等学校の話聞きよくわかった。また、障がいに関係なく健常の子も目指すところは同じであると感じる。接している年齢は幼児であるが、無関係でなく話を聞く機会があり良かった。
- ★実践発表は3つとも非常にわかりやすく説明していただき、中学校卒業後の学び、就労の状況を興味深く聞かせていただいた。就学相談、進路相談を行う中で学びの場（通常か支援学級か、高等学校特別支援学校か）に意識が向けられがちだが、それぞれの学びの場で何を大事にしているのかを本人、保護者、指導者等がしっかり知ることが必要と思う。
- ★自立に向けて、将来に向けて育てたい力で基本的な生活習慣の上に、特にコミュニケーション力（言葉の力）が大事であることを改めて認識した。また本人の障がい受容（本人にどう話していくか）も、一つの大きな課題であると感じた。